

三尺角

泉鏡花

青空文庫

「……………」

やま 山には木樵唄、水には船唄、驛路には馬子の唄、渠等は
 これを以て心を慰め、勞を休め、我が身を忘れて屈託なく其業
 に服するので、恰も時計が動く毎にセコンドが鳴るやうなもので
 あらう。また其がために勢を増し、力を得ることは、戦に鯨波を
 擧げるに齊しい、曳々と一齊に聲を合はせるトタンに、故
 郷も、妻子も、死も、時間も、慾も、未練も忘れるのである。
 おな 同し道理で、坂は照るく鈴鹿は曇る〓といひ、拾遣りたや足

袋添へてびそと唱へる場合には、いづれも疲を休めるのである、無益なものおもひを消すのである、寧ろ苦勞を紛らさうとするのである、憂を散じよう、戀を忘れよう、泣音を忍ばうとするのである。

それだから追分が何時でもあはれに感じらるゝ。つまるところ卑怯な、臆病な老人が念佛を唱へると大差はないので、語を換へて言へば、不殘、節をつけた不平の獨言である。

船頭、馬方、木樵、機業場の女工など、あるが中に、

此の木挽は唄を謡はなかつた。其の木挽の與吉は、朝から晩まで、同じことをして木を挽いて居る、黙つて大鋸を以て巨材の許に跪いて、そして仰いで禮拜する如く、上から挽きおろし、

挽きおろす。此度のは、一昨日の朝から懸つた仕事で、ハヤ其半を挽いた。丈四間半、小口三尺まはり四角な樟を眞二つに割らうとするので、與吉は十七の小腕だけれども、此業には長けて居た。

目鼻立の愛くるしい、罪の無い丸顔、五分刈に向顔卷、二三尺帯を前で結んで、南の字を大く染抜いた半被を着て居る、これは此處の大家の仕着で、挽いてる樟も其の持分。

未だ暑いから股引は穿かず、跣足で木屑の中についた膝、股、胸のあたりは色が白い。大柄だけれども肥つては居らぬ、ならば袴でも穿かして見たい。與吉が身體を入れようといふ家は、直間近で、一町ばかり行くと、袂に一本暴風雨で根返して横様に

なつたまゝ、半ば枯れて、半ば青々とした、あはれな銀杏の矮
 樹がある、橋が一個。其の澁色の橋を渡ると、岸から板を渡
 した船がある、板を渡つて、苦の中へ出入をするので、此船が與
 吉の住居。で干潮の時は見るも哀で、宛然洪水のあとの如く、
 何時棄てた世帯道具やら、缺挿鉢が黒く沈むで、蓬のやうな
 水草は波の隨意靡いて居る。この水草はまた年久しく、船
 の底、舷に搦み附いて、恰も巖に苔蒸したかのやう、與吉の家を
 しつかりと結へて放しさうにもしないが、大川から汐がさして
 來れば、岸に茂つた柳の枝が水に潜り、泥だらけな笹の葉がぴた
 くくと洗はれて、底が見えなくなり、水草の隠れるに従うて、
 船が浮上ると、堤防の遠方にすくく立つて白い煙を吐く

こゝかしこ 此處彼處の富家の煙突が低くなつて、水底の其の缺摺鉢、
 ちりあくた 塵芥、檻褸切、釘の折などは不殘形を消して、蒼い潮を満
 んく 々と湛へた溜池の小波の上なる家は、掃除をするでもなし
 うつく に美しい。

そのとき 爾時は船から陸へ渡した板が眞直になる。これを渡つて、
 けさ 今朝は殆ど満潮だつたから、與吉は柳の中で※と旭がさす、黄
 がね 金のやうな光線に、其罪のない顔を照らされて仕事に出た。

二

それから 其から日一日おなじことをして働いて、黄昏かゝると日が春

き、柳の葉が力なく低れて水が暗うなると汐が退く、船が沈むで、板が斜めになるのを渡つて家に歸るので。

留守には、年寄つた腰の立たない與吉の爺々が一人で寝て居るが、老後の病で次第に弱るのであるから、急に容體の變るといふ憂慮はないけれども、與吉は雇はれ先で晝飯をまかなはれては、小休の間に毎日一度づつ、見舞に歸るのが例であつた。

「ぢやあ行つて來るぜ、父爺。」

與平といふ親仁は、涅槃に入つたやうな形で、胴の間に寝ながら、佛造つた額を上げて、汗だらけだけれども目の涼しい、息子が地藏眉の、愛くるしい、若い顔を見て、嬉しさうに頷いて、

「晩にや又柳屋の豆腐にしてくんねえよ。」

「あい、」といつて苦を潜つて這ふやうにして船から出た、與吉はづつと立つて板を渡つた。向うて筋違、角から二軒目に小さな柳の樹が一本、其の低い枝のしなやかに垂れた葉隠れに、一間口二枚の腰障子があつて、一枚には假名、一枚には眞名で豆腐と書いてある。柳の葉の翠を透かして、障子の紙は新らしく白いが、秋が近いから、破れて煤けたのを貼替へたので、新規に出来た店ではない。柳屋は土地で老舗だけれども、手廣く商をするのではなく、八九十軒もあらう百軒足らずの此の部落だけを花主にして、今代は喜藏といふ若い亭主が、自分で賣りにまはるばかりであるから、商に出た留守の、晝過は森として、柳

の蔭かげに腰障子こしやうじが閉しまつて居ゐる、樹きの下した、店みせの前まへから入口いりぐちへ懸か
 けて、地ぢの窪くぼむだ、泥濘ぬかるみを埋うめるため、一いちめん面に貝殻かひがらが敷し
 である、白しろいの、半はんぶんくろ分ぶん黒くろいの、薄うすべに紅あか、赤あかいのも交まじつて堆うづたかい。

隣屋となりは此邊このへんに棟むねを並ならぶる木屋きやの大家たいけで、軒のき、廂ひさし、屋根やねの上うへまで、

犇ひしと木材もくざいを積つみ揃そろへた、眞まんなか中なかを分わけて、空そら高たかい長ちやう方はう形けい
 の透すきま間まから凡およそ三十疊でふも敷しけようといふ店みせの片端かたはしが見みえる、其そ
 の木材もくざいの蔭かげになつて、日ひの光ひかりもあからさまには射ささず、薄うすぐら暗ら
 い、冷ひや々やくとした店みせ前まへに、帳場ちやうば格子がうしを控ひかへて、年ねん配ばいの番ばん
 頭うが唯一たゞひとり人帳ちやうあひ合あひをしてゐる。これが角屋かどやしき敷しで、折を曲れる

と灰色はひいろをした道みちが一筋ひとすぢ、電柱でんちうの著いちじるしく傾かたむいたのが、前まへと後うしろ
 へ、別々べつべつに頭かしらを掉ふつて奥深おくぶかう立たつて居ゐる、鋼線はりが又また半なだる

みをして、ひさし廂よりも低い處を、よわく弱々と、な斜めに、おとろさも〜衰へた形で、えいたい永代の方からなが長くつゞ續いて居るが、づ圖に描いて線せんを引くと、ぶんめい文明の程度がていど段々だんく此方へこつち來るに従したがうて、やねごし屋根越ににぶ鈍ることわかが分るであらう。

たん單に電柱でんちゆうばかりでない、はりがね鋼線ばばかりでなく、はしたもと橋の袂いてふの銀杏の樹も、きしやなき岸の柳も、とうふや豆腐屋の軒も、かどや角家の堀も、へいそれ等らに限かぎらず、あたりあたりに見みゆるものは、もんはしら門の柱も、いしがき石垣も、みなたむ皆傾かたむいて居る、かたむ傾いて居るがこと盡いちやうく一様むきな向むきにはなく、ある或ものは南みなみの方ほうへ、ある或ものは北きたの方ほうへ、にしまた西の方ほうへ、ひがし東の方ほうへ、てんてん／＼すゐめばら／＼になつて、このかぜ此風そらのはない、くもり天あめの晴はれた、くもり曇くもりのない、すゐめ水すゐめのそよ／＼とした、しづ静しづかな、おだや穩おだやかな日中ひなに處しよして、なほか猶なほか且なほかつ暴ばう

風ふうに揉もまれ、揺ゆらるゝ、其その瞬しゆんかん間の趣おもむきあり。もの色いろもす
 べて褪あせて、其その灰は色いろに鼠ねずみをさした濕しつち地ちも、草くさも、樹きも、一部ぶら落らく
 を蔽おほひつゝ包おびたゞむだ夥おびたゞ多たしい材ざい木もくも、材ざい木もくの中なかを見みえ透すく溜ためい
 池けの水みづの色いろも、一いつ切さい、喪もく服ふくを着つけたやうで、果は敢かなく哀あはれ
 る。

三

界かい隈わいの景け色しきがそんんなに沈ちん鬱うつで、濕じめ々くとして居ゐるに從したがうて、
 住すむ者ものもまた高たか聲ごゑではものをいはない。歩ある行くにも内うち端わで、俯うつ向む
 き勝がちで、豆とう腐ふ屋やも、八や百ほ屋やも黙だまつて通とほる。風ふう俗ぞくも派は手ででない、

をん卷のみの濃厚ではない、女の好も濃厚ではない、髪かみの飾かざりも赤あかいものは少すくなく、皆みな心こころするともなく、風土ふうどの喪もに服ふくして居ゐるのであらう。

元ぐわん來らい岸きしの柳やなぎの根ねは、家いえ々々の根太ねだよりも高たかいのであるから、破風はふの上うへで、切きれ々々に、蛙かはづが鳴なくのも、欄干らんかんの壊くづれた、板いたのはなれ／＼な、杭くひの抜ぬけた三角形さんかくけいの橋はしの上うへに蘆あしが茂しげつて、蟲むしがすだくのも、船蟲ふなむしが群むらがつて往來わうらいを驅かけまはるのも、工こうぢ場やうの煙突えんとつの烟けむりが遙はるかに見みえるのも、洲崎すさきへ通かよふ車くるまの音おとがかたまつて響ひびくのも、二日ふつかおき三日みつかお置きに思おもひだ出したやうに巡査じゆんさがはひ入いるのも、けたましく郵便脚夫いうびんきやくふが走はし込りこむのも、鳥からすが鳴なくのも、皆みな何なんとなく土地とちの末路まつろを示しめす、滅亡めつぼうの兆てうであるらしい。けれど、滅ほろびるといつて、敢あへて此この部落ぶらくが無なくなるといふ意い

味みではない、衰おとろへるといふ意味いみではない、人ひとと家いへとは榮さかえるので、
 進しん歩ぽするので、繁はん昌じやうするので、やがて其その電でん柱ちゆうは眞ま直すくにな
 り、鋼はり線がねは張はりを持もち、橋はしがペンキ塗ぬりになつて、黒くろ塀べいが煉れん瓦ぐわ
 に換かはると、蛙かはづ、船ふな蟲むし、そんなものは、不の殘こらず石いし灰ばひで殺ころされよ
 う。即すなはち人ひとと家いへとは、榮さかえるので、恚かる景けし色きの俤おもがけ
 する、其その末まつ路ろを示しめして、滅めつ亡ぼうの兆てうを表あらはすので、詮せんずるに、
 蛇へびは進すすんで衣ころもを脱ぬぎ、蟬せみは榮さかえて殼からを棄すてる、人ひとと家いへとが、皆みな他た
 の光くわう榮えいあり、便べん利りあり、利り益えきある方ほう面めんに向むかつて脱ぬ出だした跡あと
 には、此この地ちのかゝる俤おもがけ、空うつ蟬せみになり脱ぬ殼げになつて了しまふので
 ある。

敢あへて未み來らいのことはいはず、

現げん在ざい既すでに其その姿すがたになつて居ゐるので

はないか、脱け出したあるもの。或者は、鳴き、且つ飛び、あるもの。走り、且つ食ふ、けれども衣きぬを脱いで出た蛇は、残した殻より、必ずしも美しいものとはいはれない。

あゝ、まぼろしのなつかしい、空蟬うつせみのかやうな風土は、却つてうつくしいものを産するのさんか、柳屋やなぎやに艶麗な姿が見える。

與吉は父親よきち ちちおやに命めいぜられて、心こころに留めて出たから、岸きしに上ると、思ふおもともなしに豆腐屋とうふやに目めを注いだ。

柳屋やなぎやは淺間あさまな住居すまひ、上あがりがまち、あがりがまち、うしろ、見通みとほしの四疊よでふは半はんの片端かたはしに、隣家となりで帳ちやうあひ合あひをする番頭ばんとうと同一おなじあたりの、柱はしらに凭たれ、袖そでをば胸むねのあたりで引き合あはせて、浴衣ゆかたの袂たもとを折返をりかへして、寢床ねどこの上うへに坐すわつた膝ひざに搔卷かいまきを懸かけて居ある。背うしろには綿わたの厚あつ

い、ふつくりした、豎縞たてじまのちやんくを着きた、鬱金木綿うこんもめんの裏うらが見みえて襟脚えりあしが雪ゆきのやう、艶氣つやけのない、赤熊しやぐまのやうな、ばさ／＼した、餘あまるほどあるのを天神てんじんに結ゆつて、淺黄あさぎの角つ絞のしほりの手て絡がらを弛ゆるう大おほきくかけたが、病氣びやうきであらう、弱々よわくとした後うしろす姿がた。

見透みとほしの裏うらは小庭こにはもなく、すぐ隣屋となりの物置ものおきで、此處こゝにも犇ひし々ゝと材木ざいもくが建重たてかさねてあるから、薄暗うすぐらい中に、鮮麗あざやかな其その淺黄あさぎの手絡てがらと片頬かたほの白しろのどが、拭込ふきこむだ柱はしらに映うつつて、ト見みると露草つゆぐさが咲さいたやうで、果敢はかなくも綺麗きれいである。

與吉よきちはよくも見みず、通とほりがかりに、

「今日こんにちは、」と、聲こゑを掛かけたが、フト引戻ひきもどさるゝやうにして

のぞいて見た、心着くと、自分が挨拶したつもりの婦人はこの人ではない。

四

「居ゐない。」と呟つぶやくが如ごとくにいつて、其そのまゝ通とほりぬ抜けようとする。ト日ひがあたつて暖あたたかさうな、明あかるい腰障子こししやうじの内うちに、前さつき刻から静しづかに水みづを搔かきまはす氣勢けはひがして居ゐたが、ばつたりといつて、下げ駄たの音おと。

「與よきち吉さん、仕しごと事にかい。」
と婀娜あだたる聲こゑ、障子しやうじを開あけて顔かほを出だした、水色みづいろの唐縮緬たうちりめん

を引裂いたまゝの襷、玉のやうな腕もあらはに、蜘蛛の圍を絞つた浴衣、帯は占めず、細紐の態で裾を端折つて、布の純白なのを、短かく脛に掛けて甲斐々々しい。

齒を染めた、面長の、目鼻立はつきりとした、眉は落さぬ、束ね髪の中年増、喜藏の女房で、お品といふ。

濡れた手を間近な柳の幹にかけて半身を出した、お品は與吉を見て微笑むだ。

土間は一面の日あたりで、盤臺、桶、布巾など、ありつたけのもの皆濡れたのに、薄く陽炎のやうなのが立籠めて、豆腐がどんよりとして沈んだ、新木の太桶の水の色は、薄ら蒼く、柳の影が映つて居る。

「晩方又來るんだ。」

お品しなは莞爾につこりしながら、

「難ありがた有ぞんう存ぞんじます、」故わざと慇懃いんぎんにいつた。

つかくと行懸ゆきかけた與吉よきちは、これを聞きくと、あまり自じ分の素氣そつげ

なかつたのに氣きがついたか、小戾こもどりして眞顔まがほで、眼めを一ひとツ瞬しばいて、

「え、毎まい度ど難ありがた有ぞんう存ぞんじます。」と、罪つみのない口くちの利ききやうで

ある。

「ほ、何なにをいつてるのさ。」

「何なにがよ。」

「だつてお前まえ様さんはお客きやく様さまぢやあないかね、お客きやく様さまなら

私わたしの處ところの旦那だんなだね、ですから、あの、毎まい度ど難ありがた有ぞんう存ぞんじます。」

と柳やなぎに手てをすが縋すがつて半はん身しんを伸のび出でたまゝ、胸むねと顔かほを斜なめにして、與よ吉きちの顔かほを差さ覗のぞく。

與吉よきちは極きまりの惡わるさうな趣おもむきで、

「お客きやくさま様さまだつて、あの、私わたしは木こ挽びの小こ僧ぞうだもの。」

と手て眞ま似ねで見みせた、與吉よきちは兩り手やうを突つき出だしてぐつと引ひいた。

「かうやつて、かう挽ひいてるんだぜ、木こ挽びの小こ僧ぞうだぜ。お前まへ様さん

はおかみさんだらう、柳やなぎ屋やのおかみさんぢやねえか、それ見みね

え、此方こつちでお辭儀じぎをしなけりやならないんだ。ねえ、」

「あれだ、」とお品しなは目めを睜みはつて、

「まあ、勿もつ體たいないわねえ、私わたし達たちに何なんのお前まへさん……」とい

ひかけて、つく／＼みま瞻もりながら、お品しなはづつと立たつて、與吉よきちに

向むかひ合あひ、其その襷たすき懸かけの綺きれ麗いな腕かひを、兩りやう方ほう大おほげ袈さ裟さに振ふつて見みせた。

「かうやつて威あ張ばつてお在いよ。」

「威あ張ばらなくツたつて、何なにも、威あ張ばらなくツたつて構かまはないから、ちやんちやんささかなく父ちやん爺さが魚さかなを食くつてくれると可いいけれど、」と何なんと思おもつたか與よ吉きちはうつむいて悄しをれたのである。

「何どうしたんだね、又また餘よ計けいに悪わるくなつたの。」と親しん切せつにも優やさしく眉まゆを蹙ひそめて聞きいた。

「餘よ計けいに悪わるくなつて堪たまるもんか、此この節せつあ心こゝろ持もちが快い方ほうだつていふけれど、え、魚さかな氣けを食くはねえぢやあ、身からだ體たが弱よわるつていふのに、父ちやん爺さはね、腥なまぐさいものにや箸はしもつけねえで、豆とうふ腐ふでなくつ

ちやあならねえツていふんだ。え、おかみさん、骨のある豆腐は
 出来まいか。」と思出したやうに唐突にいつた。

五

「おや、」

お品は與吉がいふことの餘り突拍子なのを、笑ふよりも先づ
 驚いたのである。

「ねえ、親方に聞いて見てください、出来さうなもんだなあ。
 雁もどきツて、ほら、種々なものが入つた油揚げがあらあ、銀
 杏だの、椎茸だの、あれだ、あの中へ、え、肴を入れて交ぜ

ツこにするてえことあ不可ねえのかなあ。」

「そりや、お前さん。まあ、可いやね、聞いて見て置きませうよ

。」

「あゝ、聞いて見てくんねえ、眞個ほんときに着きツ氣けが無くなツちやあ、臺だいなし身體からだが弱よわるツていふんだもの。」

「何故なぜ父おとつさん上なまぐさは腥あがをお食あがりぢやあないのだね。」

與吉よきちの眞面目まじめなのに釣つりこ込まれて、笑わらふことの出来できなかつたお品しなは、到頭骨たうとうほねのある豆腐とうふの注文ちうもんを笑わらはずに聞きき濟すました、そして眞顔まがほで尋たづねた。

「えゝ、其何そのなんだつて、物ものをこそ言いはねえけれど、目めもあれば、口くちもある、それで生なまじろ白しろい色いろをして、蒼あをいものもあるがね、煮にられ

皿さらの中なかに横よこになつた姿すがたでえものは、魚さかな々なと一口ひとくちにやあい
ふけれど、考かんがへて見みりやあ生身なまみをぐつゝ煮着にっけたのだ、尾頭をかしら
のあるもののの死骸しがいだと思おもふと、氣味きみが悪わるくツて食たべられねえツて、
左様さういふんだ。

詰つまらねえことを父爺ちやんいふもんぢやあねえ、山やま中なかの爺婆ぢやばでも
鹽しほしたのを食たべるツてよ。

煮にたのが、心こゝろ持もちが悪わるけりや、刺身さしみにして食たべないかつてい
ふとね、身震みふるをするんだぜ。刺身さしみツていやあ、一寸いっすんだめし試なますだ、鱈なます
にすりやぶつゝ切ぎりか、あまためくちの又目口まためくちのついた天窓あたまへ骨ほねが繋つつて肉にく
が絡まとひついて残のこる圖づなんてもものは、と厭いやな顔かほをするからね。あゝ
、「といつて與吉よきちは領うなづいた。これは力ちからを入れて對手あひてに其意そのいを得えさ

せようとしたのである。

「左様ななかねえ、年紀の故もあらう、一ツは氣分だね、お前さん、そんなに厭がるものを無理に食べさせない方が可いよ、心持を悪くすりや身體のたしにもなんにもならないわねえ。」

「でも痩せるやうだから心配だもの。氣が着かないやうにして食べさせりや、胸を悪くすることもなからうからなあ、いまの豆腐の何よ。ソレ、」

「骨のあるがんもどきかい、ほゝゝほゝ、」と笑つた、垢抜けのした顔に鐵漿を含んで美しい。

片頬に觸れた柳の葉先を、お品は其艶やかに黒い前齒で銜へて、扱くやうにして引斷つた。青い葉を、カチ／＼と二ツばかり嚙む

で手に取つて、掌てのひらのに載せて見た。トタンにかまちの取とつ着つきの柱はしらに凭もたれた浅黄あさぎの手絡てがらが此方こつちを見向みむく、うら少わかいの面おもてを合あはせた。

其時そのときまでは、殆ど自分ほんじぶんで何なにをするかに心着こころづいて居ゐないやう、無意識むいしきの間あひだにして居ゐたらしいが、フト目めを留とめて、俯向うつむいて、じつと見みて、又また梢すゑを仰あふいで、

「與吉よきちさんのいふやうぢやあ、まあ、嘸さぞこ此この葉はも痛いたむこつたらうねえ。」

と微笑ほくそんで見みせて、少わかいのが其清そのどしい目めに留とめると、くるりとまはつて、空そらぎまに手てをあげた、お品しなはすつと立たつて、しなやかに柳やなぎの幹みきを叩たたいたので、蜘蛛くもの巢すの亂みだれた薄うすい色いろの浴衣ゆかたの袂たもとは、ひらと動うごいた。

與吉は半被の袖を搔合はせて、立つて見て居たが、急に振返つて、

「さうだ。ぢやあ親方に聞いて見ておくんな。可いかい、」
 「あゝ、可いとも、」といつて向直つて、お品は搔潜つて襷を脱した。斜めに袈裟になつて結目がすらりと下る。

「お邪魔申しました。」

「あれだよ。又、」と、莞爾していふ。

「さうだつけな、うむ、此方あお客だぜ。」

與吉は獨で領いたが、背向になつて、肱を張つて、南の字の印が動く、半被の袖をぐツと引いて、手を掉つて、

「おかみさん、大威張だ。」

「あばよ。」

六

「あい、」といひすてに、急足で、與吉は見る内に間近な瀝
 色の橋の上を、黒い半被で渡つた。眞中頃で、向岸から
 駈けて來た郵便脚夫と行合つて、遣違ひに一緒になつた
 が、分れて橋の兩端へ、脚夫はつかくと間近に來て、與
 吉は彼の、倒れながらに半ば黄ばんだ銀杏の影に小さくなつた。

七

「郵便！」

「はい、」と柳の下で、洗髪のお品は、手足の眞黒な配
 達夫が、突當るやうに目の前に踏留まつて棒立になつて喚
 いたのに、驚いた顔をした。

「更科お柳さん、」

「手前どもでございませす。」

お品は受取つて、青い状袋の上書をじつと見ながら、片
 手を垂れて前垂のさきを抓むで上げつゝ、素足に穿いた黒緒の
 下駄を揃へて立つてたが、一寸翻して、裏の名を讀むと、顔の
 色が動いて、横目に框をすかして、片頬に笑を含むで、堪らない

といつたやうな聲で、

「柳ちゃん、来たよ！」といふが疾いか、横ざまに驅けて入る、
柳腰、下駄が脱げて、足の裏が美しい。

八

與吉が仕事場の小屋に入ると、例の如く、直ぐ其まゝ材木の
前に跪いて、鋸の柄に手を懸けた時、配達夫は、此處の前を横
切つて、身を斜に、波に揺られて流るゝやうな足取で、走り去
つた。

與吉は見も遣らず、傍目も觸らないで挽きはじめる。

巨^{きよだい} 大なる此^{こくす}の樟^{のきぬ}を濡^ぬらさないために、板^{いた}屋^や根^ねを葺^ふいた、小屋^{こや}
 の高^{たか}さは十丈^{ぢやう}もあらう、脚^{あし}の着^ついた臺^{だい}に寄^よせかけたのが突^つ立^たつて、
 殆^{ほとん}ど屋^や根^ね裏^{うら}に届^とくばかり。この根^ね際^{ぎは}に膝^{ひざ}をついて、伸^{のび}上^{あが}つては
 挽^ひき下^おろし、伸^{のび}上^{あが}つては挽^ひき下^おろす、大^{おほ} 鋸^{のこぎり}の齒^はは上^う下^へした
 には、兩^{りやう}手^てをかけた與^よ吉^{きち}の姿^{すがた}は、鋸^{のこぎり}よりも小^{ちひ}さいかのや
 う。

小屋^{こや}の中^{うち}には單^{たゞ}こればかりでなく、兩^{りやう} 傍^{わき}に堆^{うづ}たかみだいな材^{ざい}
 木^くを積^つんであるが、其^その嵩^{かさ}は與^よ吉^{きち}の丈^{たけ}より高^{たか}いので、纔^{わづか}に鋸^{おが}屑^{くづ}
 の降^{ふり}積^{つも}つた上^{うへ}に、小^{ちひ}さな身^{からだ}體^{ひと}一^いツ入^いれるより他^{ほか}に餘^よ地^ちはない。
 恰^{あた}も材^{ざい}木^{もく}の穴^{あな}の底^{そこ}に跪^{ひざまづ}いてるに過^すぎないのである。
 背^{うしろ}後^{かた}は突^{つきぬ}抜^ぬけの岸^{きし}で、こゝにも地^{つち}と一^{いち}面^{めん}な水^{みづ}が蒼^{あを}く澄^すむで、

ひたくと小波さゝなみの畝うねりが絶えず間まぢか近くう來る。往來わうらい傍ばたには又また岸きしに

臨のぞむで、果はてしなく組くみ違ちがへた材ざい木もくが並ならべてあるが、二十三十つづ

よ、四よツ目め形なりに、井筒ゐづつ形がたに、規きり律つたゞ正ただしく、一いつ定ていした距きよ離りを置お

いて、何どこ處こまでも續つゞいて居ゐる、四よツ目めの間あひだを、井筒ゐづつの彼かなた方たを、見み

え隠かくれに、ちらほら人ひとが通とほるが、皆みな黙だまつて歩ある行あるいて居ゐるので。

淋さみしい、森しんとした中なかに手拍子てびやうしが揃そろつて、コツく、コツくと、

鐵かなづち槌おとの音おとのするのは、この小屋こやに並ならんだ、一ひと棟むね、同おなじ一ざい材もく木納く

屋なやの中なかで、三こ個この石屋いしやが、石いしを鑿きるのである。

板いた圍がこひ圍をして、横よこに長ながい、屋根やねの低ひくい、濕しめつた暗くらい中なかで、働はたら

いて居ゐるので、三にん人にんの石屋いしやも齊ひとしく南屋みなみやに雇やとはれて居ゐるのだけ

れども、渠かれら等らは與吉よきちのやうなのではない、大工だいくと一いつ所しよに、南みなみ

屋やの普請ふしんに懸かつて居ゐるので、ちやうど與吉よきちの小屋こやと往來わうらいを隔へだ
 てた眞ま向むかうに、小ちひさな普請ふしん小屋こやが、眞ま新あらしい、節ふし穴あなだらけな、
 薄うす板いたで建たつて居ゐる、三さん方ぱうが圍かこつたばかり、編あむで繫つないだ繩なはも
 見みえ、一いつ杯ぱいの日ひ當あたり、いいきなり土つちの上うへへ白木しらぎの卓て子えぶるを一脚きやく
 据すゑた、其その上うへには大土瓶おほどびんが一個こ、茶ちや呑のみ茶ちや碗わんが七個ななつ八個やつ。
 後うしろに置おいた腰掛臺こしかけだいの上うへに、一ひとり人は匍匐はらばひになつて、肱ひぢを張はつ
 て長々ながくと伸のび、一ひとり人は横よこぎまに手枕てまくらして股引ももひきは穿あしいた脚かゞを屈か
 めて、天窓あたまをくツつけ合あつて大工だいくが寢ねそべつて居ゐる。普請ふしん小屋こやと、
 花崗石みかげいしの門もん柱ばしらを並ならべて扉とびらが左ひだり右みぎに開ひらいて居ゐる、門もんの内うちの横よ
 手こての格子かうしの前まへに、萌黄もえぎに塗ぬつた中なかに南みなみと白しろで抜ぬいたポンプすわが据すわつ
 て、其縁そのちちに釣つり棹ざうと畚ぶことがぶらりと懸かつて居ゐる、眞まにもことの靜しづかな、

大家たいけの店前みせさきに人ひとの氣勢けいほもない。裏庭うらにはとおもふあたり、遙はるか奥おくの方かたには、葉はのやゝ枯かれかゝつた葡萄棚ぶどうだなが、影かげを倒さかしまにうつして、此處こゝもおなじ溜池ためいけで、門もんのあたりから間近まぢかな橋はしへかけて、透間すきまもなく亂らんぐひ杭うを打うつて、數限かずかぎりもない材木ざいもくを水みづのまゝに浸ひたしてあるが、彼處かしこへ五本ほん、此處こゝへ六本ほん、流寄ながれよつた形かたちが判はんで印おしたごとく、皆みなさんぼう方ほうから三ツみつに固かたまつて、水みづを三角形さんかくけいに區切くぎつた、あたりは廣ひろく、一面いちめんに早苗田さなへだのやうである。この上うへを、時々とき／＼ばら／＼と雀すずめが低ひくう。

その他に此處で動いてるものは與吉が鋸に過ぎなかつた。

餘り靜かだから、しばらくして、又しばらくして、樟を挽く毎

にぼろ／＼と落つる木屑が判然聞える。

(父親は何故魚を食べないのだらう、)とおもひながら膝をつい

て、伸上つて、鋸を手元に引いた。木屑は極めて細かく、極め

て軽く、材木の一處から湧くやうになつて、肩にも胸にも

膝の上にも降りかゝる。トタンに向うざまに突出して腰を浮かし

た、鋸の音につれて、又時雨のやうな微な響が、寂寞とした巨

材の一方から聞えた。

柄を握つて、挽きおろして、與吉は呼吸をついた。

(左様だ、魚の死骸だ、そして骨が頭に繋がつたまゝ、皿の中に

残のこるのだ、)

と思おもひながら、絶たえず拍ひやう子しにかゝつて、伸のび縮ちぢみみに身からだ體だの調て

子うしを取とつて、手てを働はたらかす、鋸のこぎりが上じやう下げして、木き屑くづがまた溢こぼれて來くる。

(何なぜ故げだらう、これは鋸のこぎりで挽ひく所せ爲ゐだ、)と考かんへて、柳やなぎの葉はが痛いた

むといつたお品しなの言ことが胸むねに浮うかぶと、又また木き屑くづが胸むねにかゝつた。

與よ吉きちは薄うす暗くらい中なかに居ゐる、材ざい木もくと、材ざい木もくを積つみ上あげた周しう圍ゐは、

杉すぎの香か、松まつの匂におひに包つまれた穴あなの底そこで、目めを睜みはつて、跪ひざまづいて、鋸のこぎりを

握にぎつて、空そらぎまに仰あふいで見みた。

樟くすのきの材ざい木もくは斜なめに立たつて、屋や根ね裏うらを漏もれてちらゝくする日につく

光わうに映うつつて、言いふべからざる森しんげん嚴おもむきな趣きがある。この見み上あぐる

ばかりな、これほどの丈たけのある樹きはこの邊あたりでつひぞ見みた事ことはない、

橋はしたの袂もとの銀杏いであは固もとより、岸きしの柳やなぎは皆みな短い、土手どての松まつはいふまでも
ない、遙はるかに見みえる其梢そのざんぼは殆ほとんど水面すゐめんと並ならんで居ゐる。

然しかも猶なほこれは眞直まつすぐに眞四角ましかくに切きつたもので、およそ恁かる角かくの材ざい
木いもくを得えようといふには、柚そまが八人五日にんいつかあまりも懸からねばならぬ
と聞きく。

那そのんな大木たいぼくのあるのは蓋けだし深山しんざんであらう、幽谷いうこくでなければ
ならぬ。殊ことにこれは飛驒山ひだやまからまはして來きたのであることを聞きいて
居ゐた。

枝えだは蔓はびこつて、谷たにに互わたり、葉はは茂しげつて峰みねを蔽おほひ、根ねはたゞ一山ひとやま
を絡まとつて居ゐたらう。

其時そのときは、其下そのした蔭かげは矢張やつぱりこんなくらに暗くらかつたが、蒼空あをぞらに日ひの

てとき
照る時も、と然う思つて、根際に居た黒い半被を被た、可愛い顔
の、小さな蟻のやうなものが、偉大なる材木を仰いだ時は、手
足を縮めてぞつとしたが、

(父親は何うしてゐるだらう、)と考へついた。
鋸は又動いて、

(左様だ、今頃は彌六親仁がいつもの通、筏を流して来て、あ
の、船の傍を漕いで通りすがりに、父上に聲をかけてくれる時分
だ、)

と思はず振向いて池の方、うしろの水を見返つた。

溜池の真中あたりを、頬冠した、色のあせた半被を着
た、脊の低い親仁が、腰を曲げ、足を突張つて、長い棹を繰つて、

畫ゑの如ごとく漕こいで來くる、筏いかだは恰あたも人ひとを乗のせて、油あぶらの上うへをすべるやう。
 するくくと向むかうへ流ながれて、横よこぎまに近ちかづいた、細ほそい黒くろい毛脛けすねを
 掠かすめて、蒼あをい水みづの上うへを鷗かもめが弓ゆみ形なりに大おほきく鮮あざかに飛とんだ。

十

「與よた太坊ばう、父ちやん爺やんは何なに事ごともねえよ。」と、池いけの眞ま中なかから聲こゑを懸か
 けて、おやぢは小屋こやの中なかを覗のぞかうともせず、爪つまさきは小波さゝなみを浴あ
 ぶるばかり沈しづむだ筏いかだを棹ささして、此この時ときまた中なか空ぞらから白しろい翼つばさを翻かへ
 して、ひらくくと落おとして來きて、水みづに姿すがたを宿やどしたと思おもふと、向むかうへ
 飛とんで、鷗かもめの去さつた方かたへ、すらくくと流ながして行ゆく。

これは彌六やろくといつて、與吉よきちの父翁ちゅうおやが年來ねんらいの友達ともだちで、孝かうか行うな兒こが仕事しごとをしながら、病びやうにん人を案あんじて居ゐるのを知しつて居ゐるから、例れいとして毎日まいにち今時いまじ分ぶん通とほりがかりに其消息そのせうそくを傳つたへるのである。與吉よきちは安堵あんどして又仕事またしごとにかゝつた。

(父親ちやんは何事なにごともないが、何故なぜ魚かなを喰たべないのだらう。左様さうだ、刺身さしみは一寸すんだめしで、鱈なますはぶつぶつ切ぎりだ、魚うをの煮にたのは、食たべると肉にくがからみついたまゝ頭あたまにつなが、骨ほねが残のこる、彼あの皿さらの中なかの死し骸がいに何どうして箸はしがつけられようといつて身震みぶるひをする、まつたくだ。そして魚さかなばかりではない、柳やなぎの葉はも食切くひきると痛いたむのだ、)とおも思おもひく、又またこの偉大ゐだいなる樟くすの殆ほとんど神聖しんせいに感かんじらるゝばかりな巨材きよさいを仰あふぐ。

高い屋根は、森閑として日中薄暗い中に、ほの／＼と見える材木から又はらくと、ぱらくと、其處ともなく、鋸の屑が溢れて落ちるのを、思はず耳を澄まして聞いた。中央の木目から渦いて出るのが、池の小波のひた／＼と寄する音の中に、隣りの納屋の石を切る響に交つて、繁つた葉と葉が擦合ふやうで、たとへば時雨の降るやうで、又無数の山蟻が谷の中を歩行く登音のやうである。

與吉はとみかうみて、肩のあたり、胸のあたり、膝の上、跪いてる足の間に落溜つた、堆い、木屑の積つたのを、樟の血でないかと思つてゾツとした。

今まで其上について暖だつた膝頭が冷々とする、身體が

濡れはせぬかと疑つて、彼處此處袖襟を手で拵いて見た。仕事

最中、こんな心持のしたことは始めてである。

與吉は、一人谷のドン底に居るやうで、心細くなつたから、見透かす如く日の光を仰いだ。薄い光線が屋根板の合目から洩れて、幽かに樟に映つたが、巨大なるこの材木は唯單に二三尺角のみのものではなかつた。

與吉は天日を蔽ふ、葉の茂つた五抱もあらうといふ幹に注連繩を張つた樟の大樹の根に、恰も山の端と思ふ處に、しつきりなく降りかゝる翠の葉の中に、落ちて落ち重なる葉の上に、あたりは眞暗な處に、蟲よりも小さな身體で、この大木の恰も其の注連繩の下あたりに鋸を突さして居るのに心着いて、恍惚

として目を睜つたが、氣が遠くなるやうだから、鋸を抜かうとすと、支へて、堅く食入つて、微かにも動かぬので、はツと思ふと、谷々々、峰々、一陣轟！と渡る風の音に吃驚して、
 數千仞の谷底へ、眞倒に落ちたと思つて、小屋の中から
 轉がり出した。

「大變だ、大變だ。」

「あれ！ お聞き、」と涙聲で、枕も上らぬ寢床の上の露草の、がツくりとして仰向けの淋い素顔に紅を含んだ、白い頬に、蒼みのさした、うつくしい、妹の、ばさくした天神鬚の崩れたのに、淺黄の手絡が解けかゝつて、透通るやうに眞白で細い頸を、膝の上に抱いて、抱占めながら、頬摺していつ

た。お品しなが片手かたてにはしつかりと前刻さつきの手紙てがみを握にぎつて居ゐる。

「ねえ、ねえ、お聞ききよ、あれ、柳りうちやん——柳りうちやん——しつ

かりおし。お手紙てがみにも、そこらの材木ざいもくに枝葉えだはがさかえるやうな

ことがあつたら、夫婦ふうふに成なつて遣やるツて書かいてあるぢやあないか。

親おやの爲ためだつて、何なんだつて、一いつ旦たん他ほかの人ひとに身みをお任せまかせだもの、

道理もつともだよ。お前まへ、お前まへ、それで氣きを落おとしたんだけれど、命いのちをか

けて願ねがつたものを、お前まへ、其それまでに思おもふものを、柳りうちやん、何なんだ

つてお見捨みすてなさるものかね、解わかつたかい、あれ、あれをお聞きき

よ。もう可いいよ。大丈夫だいぢやうぶだよ。願ねがは叶ひつたよ。」

「大變たいへんだ、大變たいへんだ、材木ざいもくが化ばけたんだぜ、小屋こやの材木ざいもくに

葉はが茂しげつた、大變たいへんだ、枝えだが出來できた。」

と普請小屋、材木納屋の前で叫び足らず、與吉は狂氣の如く大聲で、此家の前をも呼はつて歩行いたのである。

「ね、ね、柳ちやん——柳ちやん——」

うつとりと、目を開いて、ハヤ色の褪せた唇に微笑むで頷いた。人に血を吸はれたあはれな者の、將に死なんとする耳に、與吉は福音を傳へたのである、この與吉のやうなものでなければ、實際また憚る福音は傳へられなかつたのであらう。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日第1刷発行

1986（昭和61）年12月3日第3刷発行

※「！」の後の全角スペースの有り無しは底本通りにしました。

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年11月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

三尺角

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>